追悼

民間国際交流の先駆け 山本正氏を想う

外務大臣 玄葉 光一郎

昨年9月に大臣に就任して以来、日々めまぐるしく変動する国際情勢を肌で感じる中で、国と国の関係というものは、常に人と人のつながりとその積み重ねの中で、作り上げられていくものであることを痛感してきた。政府のみならず、外交に携わる様々な主体（NGO、地方自治体、大企業、中小企業、メディア、学会・有識者等）が協力・連携して相乗効果を生み出し、日本の強みを一層発揮していくというこの形を、私は「フルキャスト・ディプロマシー」と呼び外交を進めていく上での基盤と考えている。

今年4月15日にご逝去された故山本正氏は、まさにこういった考えを1960年代半ばからお持ちになり、いわば日本のNGOのパイオニアとして、その慧眼をもって民間国際交流の分野で様々な活動を展開して来られた方である。1970年に財団法人日本国際交流センター（JCIE）を設立し、「国にできなくて民間でできることは何か」という問題意識を常に持ちつつ、それを実行に移し、民間人の立場から世界の指導者達の「架け橋」となる役割にその生涯をかけられた。まさに余人をもって代え難い存在であった。

国内には、山本氏の弛みない努力によって海外の政治家との交流を深めた人も多い。実際に、私自身もJCIEの企画した議員交流プログラムに何度もお世話になっており、当時培った人的ネットワークは、今もって私にとってかけがえのない財産である。これに限らず、山本氏の着想力や創造力はこれまで日本の国際交流の形にいかんなく発揮されてきた。例えば、日本、北米、欧州の3地域の委員から構成され今年43回目を迎えた三極委員会がある。それぞれの地域におけるオピニオンリーダーが一堂に会して政治や経済などのその時々の重要課題について協議を行い、政府・民間の指導者に対して政策提言を行っている。今から約40年前にロックフェラー家のデイビッド・ロックフェラー氏の提唱により日米欧委員会という名称で発足したもので、山本氏は日本側ディレクターとして準備段階から関わった。ちょうど第四次中東戦争に端を発するオイルショックが我が国を襲い、かげりが見えていた高度経済成長時代に終止符が打たれようとした頃である。山本氏は政財界の垣根を取り払い、日本の知力を結集し世界のリーダー達に直接ぶつけ、将来の日本の姿を議論し合う必要性に、いち早く気づかれ、その結果、第1回東京会合が開催されるに至った。まさに「フルキャスト・ディプロマシー」の重要なアクターであり、推進者であった。

山本氏は御自身が留学された米国との関係についても高い関心と見識を持っておられた。1994年まで9回開催され、昨年2月に「新・下田会議」として復活した日米関係民間会議（下田会議）という会議があるが、1967年の第1回会議からこれまで、日米両国の各界を代表する人々が顔を合わせて、国際情勢や日米関係につき率直な意見交換の場として特別な役割を果たしてきている。この会議をきっかけとして日米議員交流プログラムなども生まれ、米国側からの評価も高い。昨年7月に山本氏は「旭日中綬章」を授章されているが、その際には米国の多くの有識者や議員から祝辞が寄せられたという。

昨年の東日本大震災により、我々は自然の脅威をまざまざとみせつけられた。震災により多くのものを失ったが、それは同時に我々が気づかなかった多様な価値を再発見する契機ともなった。山本氏が高度経済成長時代の終わりに世界の叡智を結集して新しい時代に向かう必要性を訴えたように、いま我々も民間、NGOやNPOの活動をバックアップしながら、その知見を活かし一丸となって困難に立ち向かう必要がある。民間国際交流の先駆者としてその生涯をかけて国内外の指導者達に新たな価値を創造させてきた故山本正氏の献身的な御活動に深く敬意を表すとともに、改めてご冥福をお祈り申し上げる。

公益財団法人日本国際交流センター前理事長
故 山本 正氏

［山本正氏プロフィール］
1936（昭和11）年生まれ。1964（昭和39）年に故小坂徳三郎氏（信越化学社長）の下で、日米の財界人の民間交流を開始し、小坂氏の衆議院議員転出に伴い独立、1970（昭和45）年に日本国際交流センターを設立。以来、日本における民間の国際交流のパイオニアとして数々の事業を推進し、下田会議、日米議員交流、三極委員会など、敗戦日本の国際化を進める知的交流プログラムを推進した。2012（平成24）年4月15日死去、享年76歳。

追悼

山本正さんの思い出

コロンビア大学教授
ジェラルド・カーティス

正さん、もう僕らは40年以上の長い付き合いでしたね。私にとってその出会いは非常に劇的でした。

1968年の秋に東京に来て、着いた次の日に小坂徳三郎さんと山本さんと食事をしました。日本とアメリカの間に国会議員の交流プログラムを設立するという打合せでしたが、食事の途中、急にお腹が痛くなって、そのまま病院に連れられて、急性盲腸炎の手術を私が受けましたね。その時会ったばかりの山本さんが、私がチェックインしたばかりのホテルから荷物を病院に持って来てくれて、病院の手続きを全部していただいて、翌日お見舞いに来てくれて、なんという優しい思いやりのある方だと思ったのです。非常に感動しました。それで正の性格がどんなに素晴しいものであるかを会ったその日からわかったのです。

その後一緒に色んな仕事をしてきました。

日米の議員懇談会、下田会議、三極委員会、日米中の共同研究…。40数年あなたがリーダーとして行った色んな国際関係の交流、研究に私も参加できたことを本当に感謝しています。

正なしでは私の今までの人生はなかったと思っています。

あなたは本当の哲学を持っていて、「民間外交」ー日本人が色んな地域の人たちと知的交流・草の根交流を行うことがどれほど大事であるかをその信念を貫いてずっとしてきましたよね。

いろんな辛いことがあったのを私もよく存じていますが、辛いことがあっても一度も迷わずにこの道をずっと歩んで、一生懸命JCIE日本国際交流センターを育成して、スタッフを大事にして、こういう他の人に出来ない仕事をあなたがやってきたのです。

正さんの考え方は、「真のコミュニケーションというのは、やはりフェイス・トゥ・フェイスでなければならない。信頼関係を構築することが大事だ」ということで、ずっと世界を飛び回りました。よく時差ぼけにならないでいられるといつも不思議に思ったぐらいです。何回も何回も日本から出て行って、帰って来たらまた次の日に他の国に飛んでいくという生活をずっとしていましたね。

「あまり睡眠は必要ないよ、夜3、4時間寝ればいいんだ」という話を聞いたことがあるのですが、私がニューヨークにいるときによく向こうの夕方の4時か5時頃にあなたから電話がかかってきたのですね。考えてみれば、東京の朝5時か6時頃です。「いや何か新しいプロジェクトをやろうと思って眠れなくてジェリーに電話したんだよ」ということが何回もありました。

とにかく、アメリカだけでなく韓国、中国、ASEAN諸国またヨーロッパ、最近はアフリカの、色んな国・場所でネットワークを作り、友達を作り、外国の知識人や政府高官から見れば、やはり山本正さんは日本の顔です。大変な功績を残した素晴らしい友人であると私は思っています。

奥さんの千代子さんは私とおない年です。

我々が60歳になったときに、フォーリー大使に呼ばれ、千代子さんと正さん、家内の翠と4人で大使公邸に行って、フォーリー夫妻と6人で楽しい還暦ディナーをしたのをよく覚えています。

千代子さんは素晴らしい方で、2人で愛し合って、助け合って、本当に素敵なカップルだとずっと思っていました。今あなたが天国で千代子さんと再会しているのを思うと、心が和みます。

今日ここであなたと別れなければなりませんが、我々の心にはいつまでもあなたが生きていくという気持ちでいます。

長年僕のことを助けてくれたり、考えてくれたり、また、一緒に色んな仕事をしたり、一緒にいろんな話が出来て、あなたの価値観というかあなたの人格の素晴らしさは私にとって貴重なもので、言葉に表せない色んなことをあなたに教わって、心から尊敬し、愛している友人であると思います。

千代子さんと一緒に平和に安らかに休んでください。

ジェリー・カーティスより

2012年4月18日
東京・四谷の聖イグナチオ教会にて行われた葬儀にて

追悼

山本正さんのチャレンジ精神

東海大学教授
日本国際交流センターシニアフェロー
武見敬三

山本正さんという人は裏方に徹し、しかも在野の精神に徹した人であった。彼は、日本外交の裏方として政界、官界、財界、学界の指導者をまとめ上げ欧米およびアジア諸国との層の厚い国際交流のネットワークを作り上げた。一民間人の立場から作り上げられたこの国境を越えたネットワークは、山本正という個人の力量によって作り出されたものであり、国どうしの外交であっても、力量ある個人の人間関係がいかに重要かを示している。

私は、参議院議員をしていた12年間に山本さんの誘いを受け多くの2国間の知的対話に参加した。しかし、私が山本さんをより深く知るようになったのは2007年の参議院議員選挙に落選した後のことである。私は、日本国際交流センターのシニア・フェロー就任を要請され、新しいチャレンジの場を頂戴した。我々は世界の健康問題を外交課題として捉え、ヘルス・ディプロマシーと称してまずは洞爺湖G8サミットに政策提言することを考えた。「健康は人間の安全保障のコアーな問題です」というのが彼の健康問題への取り組みの基本であった。人間は、健康であるだけでは有意義な人生は歩めないが、健康を害してしまえば有意義な人生を築く基盤が根底から崩れるからである。彼のこの考え方は終始一貫しており、我々のヘルス・ディプロマシーの基本理念となった。

ところが我々は、最初から大きな壁にぶつかった。G8サミットの所轄は外務省であるが保健政策人材はそこにはいない。厚労省に国際課はあるがG8は所掌外で蚊帳の外という自己認識、世界銀行は世界の健康問題に取り組む重要な援助機関であるが、所管する財務省は世界銀行の銀行機能にしか着目していなかった。この縦割りの官僚組織の壁を乗り越えるために、我々は福田内閣の総理をはじめ、関係閣僚の支持を取りつけた。この時の山本さんのフットワークの良さは抜群で、あっという間に説明資料を作成し、アポイントを取りつけてしまった。とにかく仕事が早いのである。

トップダウンの支持を取りつけるまでは私と山本さんは全くと言ってよいほどに同一歩調であった。しかし、山本さんの本領はここから発揮された。徹底した市民社会重視の姿勢であり、健康関連のNGOの指導者を巻き込み、しかも海外のロックフェラー財団、ビル&メリンダ・ゲイツ財団、さらには米国外交問題評議会までも協力を取りつけた。今日、こんなことのできる日本人は何人いるだろうか。

この官官協力と官民協力を一体的に推進する環境が整備されると司令塔機能を作るために官民の担当者からなるタスク・フォース（国際保健の課題と日本の貢献研究会）を日本国際交流センターに設置することになった。そこには、民間の立場から自由に総合調整する方が確実にタスク・フォースの推進機能が確保できるという山本さんの信念があった。この山本さんの強烈な市民社会重視の姿勢には教えられるところが大変に大きかった。しかもその根底には、世界の大きな潮流を見据えて未来志向で日本社会を良くしたいという愛国心がみなぎっていた。山本さんには欧米のみならず、アジアにも多くの友人達がいたゆえんはここにあると思う。

このタスク・フォースは、国際社会においてエイズ等感染症中心の疾患別のアプローチが主流を占める中にあって、世界の人口の高齢化や非感染症の脅威が増大することを見越して、保健財政、人材等の保健システム強化アプローチを提唱し、世界の保健医療政策の主要な二つのアプローチのバランスを取り、融合させる重要な役割を果たした。

この成果を踏まえてタスク・フォースを発展的に解消し、日本国際交流センターに「グローバル・ヘルスと人間の安全保障プログラム」が設立された。民主党政権となっても政府の支援は変わらず、同プログラム運営委員会と連携した外務省、厚労省、財務省の担当副大臣連絡会議が立ち上げられた。これも山本さんが、常に超党派の国会議員との協力関係を公平な立場から作られてきたことで可能となった。こうして保健医療の問題を外交課題として捉える外交体制が民間主導で党派を越えて確実に構築されてきたのである。

山本さんは、「あと5年は仕事をしたい」と言っておられた。病床にお見舞いに伺った時に、わが国のヘルス・ディプロマシーについて「この5年間でよくここまで発展しましたね」と申し上げた時に、「まったく、ゼロからの出発でしたね」と満足な笑みを浮かべておっしゃった。そう言えば、民間の立場から国際交流のネットワークを作り上げられたことも「ゼロからの出発であった」に違いない。山本さんの人生は、常に新しいことに果敢に挑戦するチャレンジ精神によって築かれてきたものだと確信した。そして「ゼロからの出発」を恐れない果敢なチャレンジ精神こそが今日のわが国において求められる国民精神であると思う。山本さんの生涯は、我々にそのことを示している。